

26	新城	新城市立黄柳川小学校	ミナガワ ヨシノリ 名前 皆川 嘉徳
分科会番号	20	分科会名	総合学習

【研究題目】 「思い」や「願い」の実現に向けて、主体的に学ぶ子の育成
～総合的な学習の時間「身近な魅力を再発見！開設、黄柳川蒸留所」の実践を通して～

【研究要項】

1 研究題目設定の理由

以下は、6年生の児童が「最高学年として、やってみたいこと」というテーマで書いた作文を一部抜粋したものである。(下線は筆者)

- ・①学区のいいところをみんなに伝えたいです。なぜかという、学区に住む人が少なくなっている、学校がなくなるかもしれないからです。(児童A)
- ・②新しい文化をつくりたいです。理由は、この学校で過ごせるのはあと1年しかないし、③自分たちで新しい何かをつくるっていうのをやってみたいからです。(児童B)
- ・この学校の6年生は④地域のことを下学年の子に分かりやすく説明できるし、⑤学校にずっと残るようなものをたくさん作ってきたので、私たちも⑥何か学校や地域に残るようなことをしたいです。(児童C)

在籍児童は13名である。4月の時点で、下線部①④⑥のような「地域」に関する記述をしている児童が6名にのぼり、在籍する児童の約半数いることが分かった。また、中には下線部②③⑤のように、何かをつくりたいと考えていることも分かった。本校の6年生は、伝統的に地域に関わる学習を展開している。そのような先輩たちの姿を見て、「自分たちもこれまでの6年生のように地域に関わることを通して、何かを残していくことができるような活動をしたい」という思いをもっていることがうかがえる。

また、5月に行ったアンケート「学校の勉強でおもしろいなと思うものは何ですか」という問いに、7名の児童が「総合的な学習の時間」を選択した。その理由について、児童Aは「調べ学習が好きだから」、児童Dは「みんなで話し合ったり、学校のためにできることを考えたりするのが楽しいから」と記述した。これらのことから、本学級の児童は、自分が興味をもったことについて調べたり、それについて話し合ったりすることに意欲的であることが分かる。一方で、「分からない問題や難しいなと思う問題が出てきたときには、どうやって解決しますか」という問いには、「先生や友達、家の人に聞く」と回答した児童が7名、記述欄が空白になっている児童が2名いた。これは、課題を解決するための方法が「人に聞く」ことに限定されていたり、そもそも学び方を知らなかったりすることの表れだと言えるだろう。また、多くの児童が「身近な人に聞けば、何とかなる」という安易な考えをもっているという現状があることが分かる。

以上のような実態をふまえ、本研究では、多くの児童が興味・関心をもつ総合的な学習の時間において、地域に関わる教材を開発したいと考えた。そうすれば、多くの児童が学ぶことへの興味や関心を高め、進んで学びに取り組む姿が見られるのではないかと考えたからである。また、その学びに取り組む過程で、さまざまな課題と粘り強く向き合い、それらを解決するためのよりよい方法を考えたり、学んだことを次の学びにつなげたりすることができるようになってほしいと考え、研究題目を設定した。

2 研究の概要

(1) 目指す児童像

本研究では、児童が自分の「思い」や「願い」の実現に向けて学びを進めていく過程で、さまざまな課題と粘り強く向き合い、それらを解決するためのよりよい方法を考えたり、そこで学んだことを次の学びにつなげたりすることができる姿を目指す。そこで、本研究で目指す児童像を以下のように設定した。

- 自分の「思い」や「願い」の実現に向けて、
- ・学習対象である物事に興味や関心をもつことができる子 …①
 - ・粘り強く課題と向き合い、よりよい解決方法を見つけることができる子 …②
 - ・それまでの学びを、広げたり、深めたりすることができる子 …③

(2) 研究の仮説

仮説1 総合的な学習の時間において、全員が共通した「思い」や「願い」をもって学ぶことができる地域教材を開発したり、協力し合うことで解決できる課題を設定したりすれば、課題の解決に向けて、主体的に学んでいくことができるだろう。

手だてI 今まで知らなかった地域教材と出合わせ、共通の「思い」や「願い」をもたせる

総合的な学習の時間において、児童の住む学区にある身近なものを教材として扱い、全員が共通の「思い」や「願い」をもって学びを進められるような環境を設定すれば、児童の学習対象へ抱く興味や関心が引き出されるのではないかと考えた。さらに、これまで知らなかった地域教材に出合わせることで、児童は教材への興味や関心を高め、対象との関わりを通して実現したい「思い」や「願い」を明確にもつことができるのではないかと考えた。

手だてII 他者と協働的に学ぶ環境をつくる

他者と協力しながら、さまざまな情報を整理・分析したり、地域の人や友達と共に学習したりすることは、自分の「思い」や「願い」の実現に向けて必要な活動であると考えた。さらに、物事をさまざまな視点から捉えることで、多様なものの見方・考え方があることを知り、新たな興味や関心をもったり、それまでの学びを広げたり、深めたりすることができるようになるのではないかと考えた。

仮説2 学びの進め方を具体的にイメージできる支援をすれば、児童は「思い」や「願い」の実現に向けて、主体的に学んでいくことができるだろう。

手だてIII 児童が学習の見通しをもてるような「3つの条件」を意識させる

学びの主体である児童自身が、自分たちの「思い」や「願い」をもったり、それらを実現していくための道筋をイメージしたりしていなければ、主体的な学びは展開されにくいと考える。そこで、児童が具体的な学びの進め方をイメージすることができるようになるために、「3つの条件」を意識させるような支援をしようと考えた。ここで言う「3つの条件」とは、①時間的条件（時間的制約）、②人的条件（13人の在籍児童）、③物的条件（蒸留装置、地域資源など）のことである。これらの条件や制約を意識することで、具体的かつ説得力のある考えをもつことができると考える。そこで、これらの「3つの条件」を意識させることで、その考えは具体化され、根拠のある説得力のあるものへと変容すると考えた。

3 研究の方法と抽出児童について

本研究では、抽出児童A（以下、児童A）を中心に授業記録やワークシートへの記述などから、手だての有効性を検証する。児童Aは、さまざまなことに興味をもち、今までとは違う新しいことを「やりたい」と発言することが多い。しかし「やりたい」という気持ちが先走ってしまい、具体的にどのように物事を進めていくのかを考えたり、それをすることでどのような結果になりそうなのかを想像したりするのが苦手である。

資料1は、年度当初の委員会活動の時間における発言記録である。児童Aは、委員会での新たな活動を企画していく話し合いの中で、下線部⑦のように話し合いの内容に興味や関心をもち、「黄柳川ポイント制度をやってみよう」という自分なりの「思い」や「願い」をもっていた。一方で、下線部⑧や⑨のような発言からは、物事を深く考えることなく、一時的な思いによって発言し、自分の考えに根拠をもっていないことが分かる。

また、5月に行ったアンケート「分からない問題や難しいなあと思う問題が出てきたときには、どうやって解決しますか」という問いには、「先生や友達にヒントをもらおう」と記述した。加えて「6年生で何か挑戦したいなあと思うことはありますか」という問いには、「⑩思い出に残る何かを作りたいです」と記述した。これらの記述から、困難な状況に直面したときには、身近な人を頼って物事を解決するという方法しか思いつかないという現状がある反面、下線部⑦や⑩のように「何かを新しくやってみよう」という前向きな思いをもっていることが分かった。

このような特性をもつ児童Aが、自分の「思い」や「願い」の実現に向けて、粘り強く課題に向き合う中で、他者と協力しながら、よりよい課題の解決方法を考えたり、自分が学んできたことを生かし、それまでの学びを広げたり、深めたりすることができるようになってほしいと考えた。

【資料1 委員会活動時の発言記録（一部抜粋）】

- T : 学校を楽しくするために、今年から黄柳川ポイント制度っていうのを各委員会を中心にやってみないかって6年生が提案してくれたんだけど、代表委員のみんなはどう思う？
- 児童C : ポイントっていうくらいだから、ポイントカードを作ってみたらどう？
- 児童A : ⑦いいね。やろうやろう。
- 児童G : 代表委員でそのカードを作って、全校に配付するのもいいね。
- 児童C : 何ポイントためられるカードがいいかな。
- 児童F : 100ポイントくらいかな。
- 児童A : ⑧それくらいがちょうどいいかもね。
- T : 何でAさんはちょうどいいと思ったのかな？
- 児童A : ⑨ん〜、何となく。
- 児童F : 何となくじゃあだめじゃん。

4 実践と考察

(1) 学区にハッカが自生しているなんて知らなかった！【手だてⅠ、Ⅱ】

～自分の「思い」や「願い」の実現に向けて意欲的に調べ学習を始めた児童A～
 年度当初に「①学区のいいところをみんなに伝えたいです。なぜかという
 と、学区に住む人が少なくなってきたので、学校がなくなるかもしれない
 からです」（1頁参照）と作文に記述した児童Aは、授業の中で、児童Bの「新
 しい文化をつくりたいです。理由はこの学校で過ごせるのはあと1年しか
 ないし、自分たちで新しい何かを作るっていうのをやってみたくらいです」
 や、児童Cの「この学校の6年生は地域のことを下学年の子に分かりやすく
 説明できるし、学校にずっと残るようなものをたくさん作ってきたので、
 私たちも何か学校や地域に残るようなことをしたいです」という発言を聞き、
 「学区のいいところをみんなに伝えるために、何かを作ってみたくらいです」と
 発言した。児童Aの発言に学級の児童の多くが賛同し、「学校や地域に残る
 何かを作る」ことを学級の目標とし、学びを進めていくことになった。



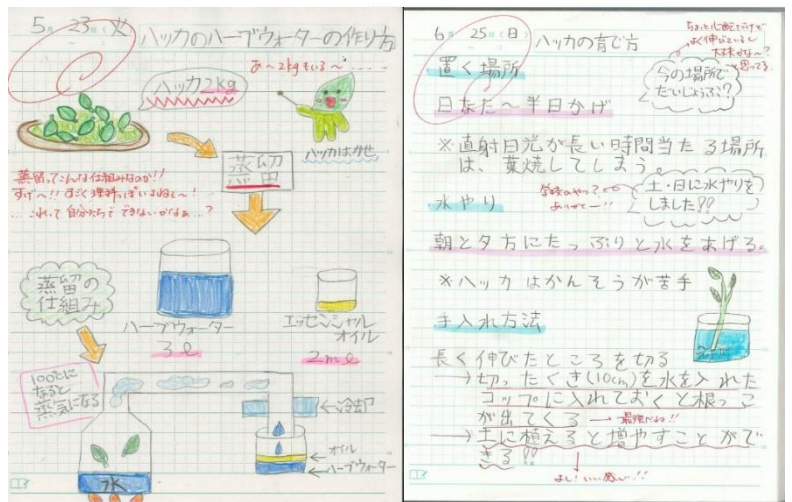
【写真1 地域の方とハッカを探る児童たち】

しかし、あまりに抽象的な目標であったため、なかなか学びを進めていくことができず
 いた。そこで、学びを進めるきっかけを与えるために、学区にハッカが自生していることを紹介した。
 これは、年度当初に学校運営協議会の方から教えていただいた情報である。ハッカは香りが強く、
 ガムや飴、アロマスプレーなどさまざまな形で商品化されている。その生かし方は多様であり、
 教材性は高いと判断した。後日、ハッカが自生している畑を見に行った児童Aは、その香りに
 興味をもち、「⑩このハッカをもらっていてもいいですか」と畑の持ち主の方にお願いをした。

児童たちは、持ち主の方に快く許可を頂くと、学校にあるプランターへハッカを
 植え替え、育ててみようと考えた。

児童Aは学習対象への興味が高まり、資料2のように、ハッカについて調べてきたことを
 自主学習ノートにまとめた。ハッカの育て方だけでなく、ハッカに似たハーブを生かした
 ハーブウォーターの作り方を調べてきたことが分かる。地域にあるものを使って、何かを作
 りたいという思いを実現するために、自分にできることから学びを進めていこうとする姿が
 見られるようになった。

【資料2 児童Aがまとめた自主学習ノートの内容】



(2) 見つけた、⑫パンフレット！奥三河蒸留所へ行ってみよう！【手だてⅠ、Ⅱ】

～行き詰まった学びを打開するために、学校外の人や物事からヒントを得た児童A～

6年生は学校にあるプランターでハッカを育て始めた。その根は強く、みるみるうちに土に根付き、青い葉を伸ばし始めた。学級では、ハッカについての調べ学習を進めていった。5/50時間目に、それまでに調べてきたことを学級で共有してみると、資料3のようなやり取りが見られた。児童Iの下線部⑫の発言をきっかけに、児童たちは「どのようにしてハッカの香りを抽出するか」ということを考え始めた。それについて児童Fは下線部⑬のように「蒸留」という方法があることを学級に広げた。それを受けて児童Aは下線部⑭のように発言した。これまでの学び（資料2）を生かし、自分たちの思いの実現に向けて、よりよい方法を学級全体に伝えることができた。

資料3の話し合いを終えた児童たちは、蒸留について関心をもち、さらに調べ学習を進めていった。しかし蒸留するためには、蒸留器という装置が必要であること、それを買うためには多額の費用がかかるということを知り、今後どのように活動を進めていくかという課題に直面していた。すると児童Aが「奥三河蒸留所」という、学校から車で約20分のところにある蒸留を専門的に行っている施設のパンフレットを学校に持ってきた。そのパンフレットは、児童Aが家族と大型商業施設

【資料3 5/50時間目の発言記録（一部抜粋）】

- 児童C： ハッカってやっぱりにおいだよね。
- 児童D： ほんとにすごにおいだね。
- 児童H： 何かスースーする感じ。
- 児童I： ⑫においなんてここから出せるのかな？
- 児童B： 焼いてみる？
- 児童F： ⑬蒸留って方法があるらしいよ。
- 児童I： 何それ？
- 児童A： ⑭私もそれ自主学ノートに調べたよ。ハーブとかでも作られてるみたい。
- 児童I： 何か理科の実験みたいだね。
- 児童B： こんなこと私たちには無理だね。
- 児童J： いやできるかもしれないよ。実験なら、理科でもやっているし。理科室に道具があるかもしれない。

設に出かけたときに見つけて、もらってきたものだった。児童Aになぜそのパンフレットをもらってきたのかを聞くと、「⑮蒸留と聞いて何かヒントになるかもしれないと思ってもらってきた。よく見たら、その本店が、新城にあることが分かって、行けるかもしれないと思ったから」と発言した。児童Aの下線部⑮の発言をきっかけに、学級全体で困っていることを出し合い、それらを解決するために奥三河蒸留所を訪れ、そこでアドバイスをもらうことにした。

心地よい香りの漂う蒸留所に足を踏み入れると、多くの児童が「いいにおい」「リラックスする感じがする」とつぶやく姿が見られた。これらの様子から「香り」への関心が高まっていることが分かった。児童Aは、蒸留所の方にアドバイスをもらうことで、資料4のようなヒントを得た。そして、これからの学びをイメージし、自作の蒸留器を使ってハーブウォーターを作ろうとしていることが分かる。また、ただ作るだけではなく、ハーブウォーターを作るためには多くのハッカが必要であることにも気がついている。この時点で児童Aは、ハッカとハーブの区別がついていないが、資料4の点線内の記述を見ると、ハッカを蒸留することで作られるものをハーブウォーターと捉えていると判断できる。

(3) ハッカ水が白くなっちゃった、なぜだろう？【手だてⅡ】

～友達と話し合っ中で新たな考えに気づき、次の課題を意識し始める児童A～
自作の蒸留器を製作するためには、ガラスを変形させるという工程が求められた。しかしそれは、児童への危険が伴うと判断したため、数人の教師で協力して製作をすることにした。蒸留器ができると、いよいよ蒸留であるが、児童は一度も蒸留を経験したことがなく、そもそも蒸留のイメージがつかめていないことが分かった。そこで、改めて奥三河蒸留所を訪れ、蒸留体験をさせてもらうことにした。ここでは、私たちの目指す「水蒸気蒸留法」についての説明を聞いた。ハッカを切って蒸留の準備をするところから、ハッカが実際に蒸留されていくところまでを体験したり、見学させてもらったりした。児童Aは、蒸留体験後の振り返りに資料5のように記述した。ハッカの蒸留の仕方について興味をもち、蒸留体験での学びを次につなげようとしていることが読み取れる。

蒸留の仕方を学んだ児童たちは、自分たちが育ててきたハッカを、自作の蒸留器で蒸留してみることにした。写真2は、蒸留水がゆっくりと1滴ずつフラスコの中に落ちていく様子を見つめる児童たちの様子である。蒸留後約1ヶ月が経ったある日、児童Jが、教室に保管しておいた蒸留水が白く濁り始めていることに気がついた。そこで、

【資料4 奥三河蒸留所訪問後の児童Aの振り返り】

【振り返り】
 ⑮蒸留さんのお話を聞いて分かったこと、気づいたこと、感じたこと、疑問に思ったことなどを書いて。
 おまじゆ、
 一番びっくりしたのは、3kgのハッカで0.3mlのエッセンシャルオイルしかとれないこと。けどほぼずっとはみかする。あとエッセンシャルオイルは食べられないけどハーブウォーターは食べられる。食べるヒスススする。
 ⑯今日の学びを通して、これからどうしていきたい？ 何をしたい？
 自分たちで蒸留機を作ってハーブウォーターを作りたい。今のハッカの量じゃ足りないと思つておぼろげに書いてます。

【資料5 蒸留体験後の児童Aの振り返り】

●振り返り
 私はハッカはなべにそのまま入れると思つていました。けれど切つて入れたのでびっくりしました。大きのまま入れるとなべからあふれてしまうので小さく切つたほうがいいです。



【写真2 学校での初めての蒸留の様子を見つめる児童たち】

【資料6 18/50 時間目の発言記録（一部抜粋）】

T : Jさんが気づいたこと、みんなに伝えてみてよ。みんなはどう思うかな？
 児童J : (フラスコに近づいて) ねえ、なんか白く濁っていると思わない？
 児童I : 確かに。なんでかな？
 児童B : ⑮これだと地域の人には配りづらいよね。
 児童C : ⑰白っぽいと、ちょっと嫌だよね。
 児童I : でも見えなければいいんじゃない？
 児童A : そういふ問題じゃないでしょ。
 児童D : ⑱ていうか、今更だけど、私ハッカのにおいきつんだけど…。
 児童I : ⑲実は私も…。
 児童A : えっ、そうなの？こんなにいいにおいなのに。⑳でもそういう人が他にもいるかもしれないね。
 児童F : ㉑何となく私は温度が高かったことと、光が当たっていたことが原因だと思うから、冷蔵庫で保管してみたらどうかと思うんだけど。根拠はないけど…。ところで、㉒違うもので蒸留ってできないのかな。
 児童A : ㉓あ、そういえば蒸留所にハッカじゃない香りの水が置いてあった気がする。何があったかなあ…。
 児童H : 蒸留所にあったかは分からないけど、㉔「クロモジ」っていう木かな？これは、いいにおいがするっておばあちゃんが言ってたよ。
 児童J : 何？そのクロモジって？どんなものなの？
 児童H : 私も分かんない。聞いただけだもん。
 T : この中でクロモジっていうものを知っている人いる？(挙手した児童は0名)

白く濁ってしまう原因についてクラスで話し合うことにした。前頁資料6は、その時の発言記録である。教師は、蒸留水が白く濁ってしまう原因について考えさせることをねらっていた。しかし、児童Bの下線部⑯のような発言や、児童Cの下線部⑰のような発言は出たものの、児童Dの下線部⑱や児童Iの下線部⑲の発言をきっかけに、ハッカ以外の香りについての話し合いが展開された。それを受け、児童Aは下線部⑳のように発言した。今まで「ハッカ＝よい香り」だという考えだったものが「そうとは限らない」という考えに変容していることが分かる。また、児童Fの下線部㉑の発言を受け、児童Aは下線部㉒のように発言した。これまでに学んできたことを思い出し、課題の解決に向けて新たな可能性を見出そうとしている姿であると言えよう。ハッカの香りが得意ではない人もいることを知った児童Aは、児童Hの下線部㉓の発言を聞き、ハッカ以外の材料に目を向けるようになった。

後日、児童Aは祖父と共に家族が所有する山へクロモジを探しに行き、見つけたものを学校へ持ってきた。加えて、クロモジと共に「クロモジ茶」という製品も見つけ、友達に紹介した。ハッカ以外の材料でも蒸留水を作ることができないかと考え、クロモジに興味をもった児童Aは、話し合いでの学びを生かし、「ハッカの香りが苦手な人のために、学区にある他の材料を探そう」という新たな課題を設定し、家族と協力しながら学びを進める姿が見られた。

またここでは、児童Fの㉑の発言をふまえ、次の機会に蒸留した水は、冷たくて暗い冷蔵庫で保管をし、様子の変化を確かめてみることにした。なお、保管をした水は、500mlが1本と300mlが1本である。なお、500mlの蒸留水は蒸留し始めの1滴目から溜めたもの、300mlの蒸留水は途中から溜めたものである。これらが、以下の実践(4)における学びのきっかけとなる。

(4) もう時間がない。どうする？ハッカプロジェクト【手だてⅢ】

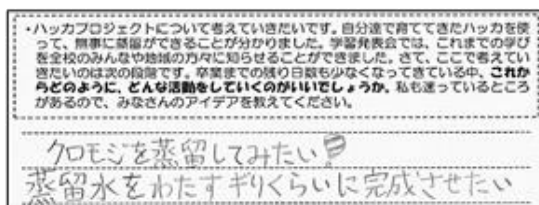
～保管方法の実験結果や卒業までの日数をふまえ、やるべきことを考える児童A～

35/50時間目に、(i) 冷蔵庫に入れても、蒸留水が白くなってしまう原因を予想することができる、(ii) 振り返りを生かし、自分たちで解決していくべき課題を設定することができる、(iii) 卒業までの日数をふまえ、具体的な活動の進め方の見通しを立てることができる、という3つの目標を立て、授業を行った。

先述のとおり、児童Fの発言をふまえ、蒸留水の入った2本のフラスコを冷蔵庫で保管した。すると、500mlの蒸留水は白く濁り、300mlの蒸留水は透明のままであることが分かった。この違いはなぜ生まれたのかを考えることを通して、自分たちの「思い」や「願い」の実現に向けて、具体的にやるべきことを考えられるようになってほしいと考え、授業を展開した。

ここでは、見通しをもっていないときの児童の考えが、見通しをもったときにどのように変容するのかを確かめるために、授業前に「これからどんな活動をしていくのがいいと思いますか」という問いを投げかけ、ワークシートに自分の考えを書かせた上で、その考えを起点にしながら授業を展開していくことにした。どの児童も卒業までの残り日数を意識せず、自分の思ったことをそのままワークシートに記述した。児童Aは資料7のようにワークシートに記述した。実践(3)で抱いた思いを実現させたいと考えていることに加え、蒸留水が白く濁ってしまうことを意識して、地域の方々に渡す直前に完成させたいという思いを抱いていることが分かる。各児童が自分なりの考えをもってのぞんだ授業では、資料8のような話し合いが展開された。ここでは、蒸留水が濁る原因についての話し合いが行われたが、児童Aが発言することはなかった。しかし、児童Bの下線部㉔の発言を聞き、実際に2つのフラスコに入った蒸留水のおいさを確かめる姿が見られた。児童Aは、2つの蒸留水のおいさを比べ、「(濁っている方を指して)こっちの方がスースーする感じがする。でも(透明な方を指して)こっちの方が蒸留所でもらってきたハッカ水のに

【資料7 児童Aの考える今後の活動】



【資料8 35/50時間目の発言記録Ⅰ (一部抜粋)】

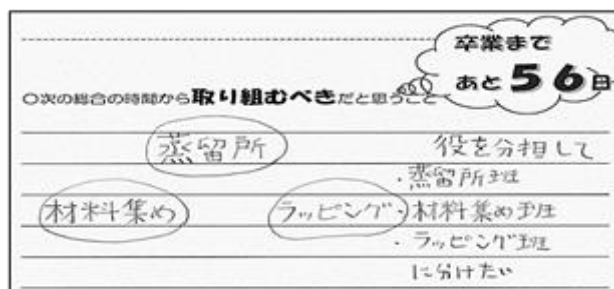
- T : そつえば、水が白くなるかどうかを確かめるための実験をしていたのを覚えているかな？
- 児童B : Fさんが冷蔵庫に入れてみようって言っていたよね。
- 児童F : えっ、どうなったのかな？
- (Tが2つのフラスコを児童に見せる)
- 児童F : 何で？何で1つは白くて、1つは透明なの？
- 児童C : 冷蔵庫の冷たさが少し違ったんじゃないかな？
- 児童B : 両方とも乾燥ハッカだけ？
- 児童C : あ、ラップで蓋をしているところの輪ゴムがきちんとしまっていなかったんだよ。
- T : (500mlの方を指さして) これ配れるかな？
- (首を横に振る児童たち)
- T : (300mlの方を指さして) じゃあこっちは？
- 児童H : それなら大丈夫だし、なんか透明だから新しい感じがする。
- 児童B : ㉓そつえば、蒸留所のお姉さんが最初と最後においが違つって言ってなかった？1回においをかいでもみようよ。

【資料9 35/50時間目の発言記録Ⅱ (一部抜粋)】

- T : さて、どうしたものかね？
- 児童F : ㉔よく分からないけれど、色が違っているのは事実だから、それについて調べてみるのがいいと思う。
- 児童B : ㉕インターネットで調べてみたり？
- T : ㉖全員でそれについて調べていく？卒業まであと56日しかないよ？
- 児童H : ㉗分かれてやればいいんじゃない？
- 児童B : もっとたくさん材料を調達する人とか。
- 児童I : ㉘材料を集める部隊と、ラッピング部隊と、白くなる謎解明部隊と…
- T : そついう話になると、まだまだやることはたくさんありそうだね。今日学んだことを振り返って、この後どうしていけばいいかを考えてみよう。

おいに近い感じがする」とつぶやいた。前項資料9は、児童が2つの蒸留水のにおいを確かめた後の話し合いの様子である。児童Fの下線部②⑥の発言や、児童Bの下線部②⑦の発言は、物事に興味や関心を抱いているが、先を見通していないと考えた。そこで、下線部②⑧のような問い返しをした。すると、児童Hの下線部②⑨の発言や児童Iの下線部②⑩のような発言が出てきた。時間には限りがあることに気づき、先を見通して課題を解決していこうとする姿が見られる。ここでも、児童Aの発言は見られなかったが、授業の振り返りには資料10のように記述した。授業が始まる前までは、前項資料7のような思いをもっていた児童Aの考えが、話し合いを通して時間を意識し、見通しをもった考えに変容したことが分かる。

【資料10 授業後の児童Aの記述】



4 仮説の検証

(1) 仮説1について

ア 手だてI：今まで知らなかった地域教材と出合わせ、共通の「思い」や「願い」をもたせる

児童Aは、今まで学区にあることを知らなかったハッカと出合ったことで、ハッカに興味をもち、粘り強く課題と向き合うことができたと考えられる。それは「学校や地域に残る何かを作る」という目標の実現に向けた取り組みの中で、資料2のような学びや下線部②⑤の発言が根拠となる。ハッカについて興味をもち（目指す児童像①）、意欲的にハッカについての学びをまとめたり（目指す児童像③）、家族で出かけたときに自分たちの学びを進めるヒントを得ようとしたり（目指す児童像②）する姿は、本研究で目指す児童像が、児童Aなりの形で表出されたものであると言える。これらのことから、手だてIは有効であったと考える。

イ 手だてII：他者と協働的に学ぶ環境をつくる

児童Aは、友達や地域の方、家族、蒸留所の方と協働的に学ぶことで、主体性を発揮しながら、粘り強く課題に向き合う姿が見られた。それは下線部②⑪の発言、3頁における家族で出かけたときにパンフレットをもらってくるという行動、資料4の下線部の記述、資料6の下線部②⑬の発言などが根拠である。ハッカの香りに興味をもち、もらっていったよいかを聞いてみる姿（目指す児童像①）、自分たちの学びを進めるためにヒントを得ようとパンフレットを探してくる姿（目指す児童像②③）、自作の蒸留器で蒸留水を作ろうというイメージをもつ姿（目指す児童像②）、実際に蒸留所に足を運び、そこで学んだことをクラスに広げようとする姿（目指す児童像③）は、本研究で目指す児童像が、児童Aなりの形で表出されたものであると言える。これらのことから手だてIIは、有効であったと考える。

(2) 仮説2について

ウ 手だてIII：児童が学習の見通しを立てられるような「時間的条件」を示す

学びを進めていく上で、「時間的条件」を意識させることで児童Aの考えに変容が見られた。それは、資料7の記述が資料10の記述へと変わったことが、その根拠となる。卒業までの日数を意識させ、学びの見通しを立てさせることをねらい、下線部②⑧のような問い返しをしたことで、資料9の下線部②⑨や②⑩のような発言が生まれた。それらを受けて児童Aは、「蒸留所班」、「材料集め班」、「ラッピング班」に分けて活動を進めていった方がよいという考えに変容したのである。これは本研究で目指す児童像②③の表れであると言える。また、上記の「時間的条件」を意識させる支援をすると、13人全員の児童の考えにも変容が見られた。学びの見通しが立っていない状態である授業前に「これからどんな活動をしていくのがいいと思いますか」と問うと、児童Iは「長い期間で蒸留すると、最初の方にやったものがくさるので、短期間でパッと蒸留をやったほうがいいと思う」と、児童Bは「やっぱりハッカだけだと苦しいと私は思いました。前話したみたいにヒノキやスギを使うのがいいと思いました」と記述していた。学びの見通しを立てられるような支援をした後の「次の総合の時間から取り組むべきだと思うこと」という記述欄には、児童Iは「白くなるナゾを解明する部隊、材料を集める部隊、ラッピング部隊に分かれてやる。③次の総合までに班を決める」と、児童Bは「白くなってしまふなぞを蒸留所に聞きに行くチームと、材料集めをするチームと、ラッピングチームに分けてやった方が④効率がいいと思ひます」と記述した。下線部②⑬や②⑭の記述は、卒業までの日数を意識し、自分なりに学びの見通しを立てようとしている姿であると捉えることができる。これらは、目指す児童像②③の表れであると言える。以上のことから、手だてIIIは有効であったと考える。

5 研究の成果と今後の課題

本研究で構想した学びを通して、子ども達は今まで知らなかった地域教材に向き合い始めた。その中で教師が、他者と協働的に学ぶ機会をつくったり、学習の見通しを立てられるような支援をしたりすることは、児童自身が自分の思いや願いの実現に向けて主体的に学びを進めていくための手だてとして、有効であったと言える。